

同志社大学国文学会叢報

昭和四十七年度国文学会役員

会長 土橋 寛

常任委員 南波 浩、小森 啓 助

安永 武人、里井 陸 郎

黒沢 幸三、松井 秀 幸

吉川 敏郎、久保田 孝 夫

中村 淑子、金子 彰

藤原 則行、加藤 正 二

二十八名

評議員 上田 吉晴、宮 下 隆 夫

会計監査 昭和四十七年度国文学会活動状況

〈国語教育研究会（六月十一日・教育文化センター）〉

ことば（特殊学級） 奈良王寺中 大谷 聖夜子

文学（詩） 茨木養精中 山崎 一

古典（平家） 光華女子高 今井 昌 子

作文 同志社香里中 生井 武 世

〈総会、研究発表会（十一月二十六日・府立婦人センター）〉

源氏物語宇治十帖における自然 広川 勝 美（助教授）

藤村「夜明け前」をめぐって 水上 勲（伊丹高校）  
高校の国語教科書 徳 永 光次郎（桃山学院高）

昭和四十六年度卒業論文題目

〈古代文学前期〉

額田王論 井川 愛 子

古事記中下巻の説話―その文学的人間形象をめぐって―

小坪 純 子

人麿の宮廷挽歌について 松本 恭 子

大伴家持小論 松本 波留美

古事記における他界観 中村 啓 子

万葉集東歌―その相聞歌の特質― 中尾 真由美

初期相聞歌―抒情詩の成立― 下野 真 有 美

古事記における出雲神話 竹内 裕 子

〈古代文学後期〉

道綱母と『かげろふ日記』 秋道 由 子

蜻蛉日記の執筆動機 萩原 佐和子

「紫式部日記」における式部像について 林 純 子

「寝覚物語の研究」 福永 万知子

蜻蛉日記の世界（上、中巻を中心として） 藤本 美 紀

紫式部論―日記よりみた― 亀井 万千子

堤中納言物語「蟲めづる姫君」―蟲めづる姫君の人物像及

びその持つ意味について― 川南 政子

清少納言における枕草子の位置 小林 咲子

清少納言の美の世界 児玉 佐代子

浮舟物語に導かれるもの 小南 静子

六条御息所の役割 久世 越子

紫式部日記における式部の人間性について 前川 秀子

堤中納言物語の研究 中西 利子

「和泉式部日記」論 那須 佳久子

紫式部の厭世観の要因についての考察 大城 徳子

「夜の寝覚」作品論―御物怪騒ぎを中心として― 音田 能子

「竹取物語」の創作方法と意図 澤 慶子

紫式部の人間像 上田井 裕子

竹取物語における笑いについて 山口 景子

平中物語考察 山崎 一

枕草子 谷川 茂夫

〈中世文学〉

「世阿弥夢幻能の方法」―妄執と語り― 江野 幸治

観世小次郎信光について―世阿弥との比較を中心に―

御伽草子と夢について 前田 真理子

覚一本平家物語の抒情性をめぐって 松下 憲二

源実朝 三島 信子

徒然草における人間観 高原 映子

「平家物語」における「死」―俊寛・文覚をめぐっての説 杉本 明子

話的―考察― 鈴木 紀美

閑吟集の本質について―閑吟集は民衆文学か否か―

ものくさ太郎・福富長者物語にみるお伽草子 辰見 恵子

「覚一本平家物語の文学的達成」 宇佐川 千代

覚一本平家物語灌頂巻論―屋代本との比較における― 吉川 敏郎

平家物語の内的構造 伊藤 道子

平家物語に関する一試論―俊寛有王説話を中心に― 小山 康雄

叙事詩としての平家物語 神原 高治

林 信夫

観阿弥をめぐる試論―種・作・書の方法を中心に―

萬代 陽子

〈近世文学〉

西鶴の創作意識について

橋本 康子

「好色一代女」

稲継 節子

「英草紙」考

北川 ひとみ

近松半次論―作品の永遠性―

小山 富紀子

「東海道四谷怪談」の構造

三宅 映子

「好色五人女」

茗荷 育子

西鶴町人物考察

中村 真寿美

町人物における西鶴の意識について

岡本 孝子

兩月物語・春雨物語

山本 順子

近松の「姦通物」におけるドラマツウルギ―

吉村 有美

好色一代男の成立

谷畑 順

芥川龍之介試論

藤井 真悟

〈近代文学〉

谷崎潤一郎の芸術―初期作品を中心に―

伊井 真知子

「三島由紀夫論」―モデル小説を中心に―

亀田 慶子

中原中也研究ノオト 詩集「山羊の歌」をめぐる〈叙情〉と

〈詩意識〉

木俣 進

吉行淳之介論

木村 光博

永井荷風論―その前半を中心に―

松山 美代子

三島由紀夫論

神谷 佳代

三島文学と現代

中村 康子

夜明け前作品論

大谷 聖夜子

漱石の個人主義

大上 節子

さよなら子ども時間

坂口 真理子

梅崎春生論

阪口 正純

「武者小路実篤」序説―自我確立と環境―

薄 松巳

志賀直哉論

高島 文香

坂口安吾論―肉体自体の思考―

高志 美子

国木田独歩論―小民への接近を中心に―

滝川 順子

谷崎潤一郎―昭和初期十年間の代表作について―

中田 真左子

有吉佐和子論

立花 愛子

夏目漱石論―苦惱の表出―

徳田 由美子

島尾敏雄の表現

刀根 道夫

「硝子戸の中」前後―その創作主体について―

上田 和代

「こゝろ」試論

内多 文子

柴田翔の世界―「されどわれらが日々」を中心として―

古川 光代

作品『或る女』 観念論者有島武郎の「生」の原点から奈落

山本 寿子

までにみられる悲劇性

安井 恭子

大岡昇平論―『野火』を中心に―

加藤 彦治郎

鷗外「舞姫」の世界―試論―

村瀬 一八

伊東静雄論―『哀歌』の伊東静雄―

古庄 光則

林房雄論

藤島 百合夫

伊藤整の文学的道程

宮沢賢治論―修羅の旅とその挫折から悟りへの道程

昆野 正紀

丹羽文学の本質

宮下 清和

武田泰淳論 武田文学と戦後文学の新方向について

中井 みち子

火山灰地論

小川 好文

二葉亭四迷試論―『浮雲』中絶の意味―

河北 満智子

安部公房文学の虚構性

瀬野 憲一

坂口安吾論序説―夢の総量は空気であった―

原田 義春

〈国語学〉

愛という語の受け入れ

大石 卓樹

上代におけるウツクシ・ウルハシの語誌より万葉の文字

吉野 政治

「愛」の訓詁に及ぶ

吉野 政治

修士論文題目

〈昭和三十九年修了〉

格助詞「の」・「が」の用法について

花田 文枝

紫式部の文学と仏教思想―日記および宇治十帖を中心として―

広川 勝美

宇治十帖の研究―浮舟物語の構想と展開について―

大重 俊浩

島崎藤村論―リヤリズムとの関連において―

八木 良夫

〈昭和四十年修了〉

〈昭和四十一年修了〉

ワニ氏とヤマトタケル伝承

黒沢 幸三

〈昭和四十三年修了〉

椎名麟三論―「自由」の問題を中心に―

今 沢 道 子

万葉集における抒情詩の成立

駒 木 敏

蛇簪入譚「芋環型」昔話の研究

宮 本 正 章

〈昭和四十四年修了〉

中野重治論

水 上 勲

「平中物語成立事情考」

神 保 文 成

芥川龍之介論

管 野 信 賢

挽歌成立について

上 田 吉 晴

「伊勢物語狩使本の研究」

中 里 隆 憲

〈昭和四十五年修了〉

紫式部日記論考

原 田 敦 子

宇田川文海の続き物

堀 部 功 夫

〈昭和四十六年修了〉

漢語と和語―美しさを表わす語彙の歴史を通して見たる―

浅 野 敏 彦

近松世話悲劇の形成―『曾根崎心中』の構造と方法―

生 井 武 世

万葉歌の解釈小論

坂 本 信 幸

枕詞の本質とその展開―柿本人麿をめぐる―

今 井 昌 子

日本靈異記と景戒

寺 川 真 知 夫

編 集 後 記

昭和四十一年三月『同志社国文学』第一号が発刊されて早くも八年の歳月が流れ、ここに八号を送ることになった。本号の特色は一目してわかるように、若い方々の投稿を中心にして編集されていることである。そのうち坂本信幸君、今井昌子さん、浅野敏彦君、菅野美恵子さん、内多文子さんの諸氏は初登場であり、従って本号は今までにない清新の気に溢れている。

今回で六度目をかぞえる安永先生の「戦時下の文学」は、研究の方法、テーマへの沈潜において毎回世評の高いものであるが、特にわれわれ若き世代への強い訴えを含んでいる。その他駒木敏君の『靈異記』、原田敦子さんの『紫式部日記』の考察はそれぞれ新しい問題を投げかけている意欲的な論文である。近年にない暖冬のなかに、編集と印刷は着々と進んでいる。みなさん方の手許にこの雑誌がとどくのは間もなくのことと思われる。

(黒沢幸三)